

「亀の背にのり竜をいただく～歴史研究の材料あれこれ～」

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。大学は、高校生の頃と違って、与えられたたくさんの時間を自分でプランニングして暮らしていくところです。どんな生活が待っているか十人十色、楽しみです。

私は今アジア史の研究をしています。そんな私も高校生の頃は遠距離通学をしていて、宿題と部活に追われ史跡を訪れる余裕は全くありませんでした。学校の近くには江戸時代や明治時代の史跡がゴロゴロしていたにも関わらず、です。私が歴史に目覚めたのは大学に入ってからです。たくさんの時間を手に入れた私は、史跡巡りにいそしみました。京都から一、二日行程の中国・四国～北陸地方は随分歩き回りました。史跡では建物を見、庭を見、展示品を見ます。そこでもう少し時間に余裕があると、石を見るのが常となりました。石といっても転がっているものではなく立っているものです。その石はいつからそこにあるのか、面に刻まれた文字はいつのものなのかが気になりました。石を見るようになったきっかけは大学の授業でした。恩師は文革の余韻が残る一九八〇年代に中国を訪れ、幾多の試練を乗り越えて街や村をめぐって石碑を調査した方で、その成果を大学で授業されていました。

中国の碑に興味を持ったのは、私の恩師が初めてではもちろんありません。石碑に対する研究は十世紀には始まり、いわゆる「清朝考証学」が盛んな十七世紀以降、歴史学・考古学・言語学などの方面で、多くの研究が蓄積されています。清朝考証学者の時代には直接目にできた碑は限られていました。現在と違って交通の便が悪く、多くの研究は拓本や昔の人が記録した書物によって行われていました。それでも何世紀にもわたって石碑の研究が行われてきたのは、石の上に刻まれた資料が永続性と同時代性を兼ねあわせているからです。石に彫られた文字は多少の風雨では消えないし、燃えてしまうこともありません。彫られたのが仮に、私が専門とするモンゴル帝国の時代だとすれば、その十四世紀に彫られたままのかたちで、今も私たちの目の前に立っているのです。

私は大学の長期休暇を利用して、現地調査・踏査に出かけています。いちばんの目的はもちろん石碑です。各地の寺廟や史跡を訪れ、建物や展示物を見学し終わったら、いよいよ石を見て回ります。碑は通路の両側に対称に建てられていたり、碑をまとめて「碑林」として保存していたり、時には椅子や溝板に転用されていたりとさまざまです。石碑を研究に使う場合、碑の大きさや彫りの美しさ、石の質も重要な要素となります。十四世紀頃の碑は大きいものだとたいてい、亀のかたちに彫られた石（亀趺）の上に長方形の石が載

り、最上部に竜の彫り物がしてあります。タイトルの「亀の背にのり竜をいただく」とはこのことを指しています。中国の伝説上、亀は大地の下にいて大地を支えていると考えられていました。碑が亀にのっているのは、それが一つの仮想世界を表していたからなのでしょう。竜の方は皇帝の象徴でもあり、権威づけのために彫られていたと思われます。モンゴル高原に立てられた碑でも、羊の上にのっているものはないのです。そして、その亀の形式や表情、しっぽの形を比較するのも立派な時代考証になります。亀のお尻を見ては写真を撮り歩く外国人は、さぞや怪しく映ることでしょう。

写真が禁止されていないところでは、石碑自体に加え周りの様子も記録します。次に時間の許す限り、石から文章を読み取っていきます。多くの石碑の文章は、清代以来の研究ですでに書物に文字おこしがされているので、それをコピーしたり情報をメモしたりして準備しておき、旅行の時にそれを持って行きます。実



際の石碑と比べてみると、昔の学者が読み間違えていたり、書物が再版される際に誤った情報が紛れ込んでいたりするので、実物見ることには大きな意味があります。歴史学は年代ごとに何が起こったかすでに明らかになっている学問ではけっしてありません。このように、書物を読んでいるだけではわからないことが、現地踏査や博物館見学などからわかることもあるのです。石碑の前で調べ物をしている時間は貴重であり、私にとって至福の時です。

さてさて、実際にはそういう至福の時間はあまりとれないのが現状です。教員になると学生時代と違ってゆっくりと史跡を踏査する時間は無くなっています。でも、学問は教育の糧となり、研究者としての血となり肉となるという確信はあります。自分の大学時代、そのような教育によって今の自分が作り上げられたのですから。「知」の input を大事にして、豊かな output ができる人間になりたいと思います。明治大学は、書物・教員・ともに学ぶ仲間たちにとってもめぐまれたところです。皆さんも、この素晴らしい環境の中で、大学時代の出会いやひらめきを大切に、めぐまれた時間を有意義に過ごしてください。【季刊『明治』第38号（明治大学事業部広報課）、pp. 20-21 掲載、写真はHP掲載時（2014.3）に追加】